

開演十四時（開場十三時）

仕舞

仕舞

狂言

立衆／早乙女
立衆／早乙女
立衆／早乙女
立衆／早乙女
立衆／早乙女
立衆／早乙女

小鼓 大鼓

後見

子方／関寺の稚児

ワキ／関寺の僧

ワキツレ／從僧
ワキツレ／從僧
ワキツレ／從僧

後見

小鼓 大鼓

地謡

本天

地謡

地評

S 席:12000円(正面)

A席:10000円 (正面の一部／中・脇正面)

B席:7000円 (中・脇正面/2階席)

※25歳以下優待席4000円(B席に同じ)

(公社)金春円満井会

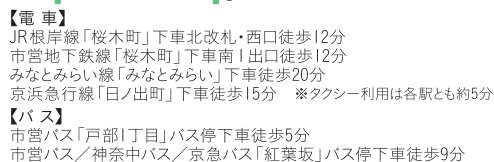
電話. 03-6913-6714 / Fax. 03-6913-6775

<https://www.komparu-enmaikai.com/>

横浜能楽堂

電話. 045-263-3055

<https://yokohama-nohgakudou.org/>



※上演中の録音・録画・撮影はお断りいたします。
 ※新型コロナウイルス感染対策のため、検温・手指の消毒・マスク着用にご協力ください。
 ※37.5度以上の発熱がある場合は入場をお断りする場合がございます。
 ※食堂、喫茶の営業はございません。

嘉例の田植の神事を迎える。賀茂神社につかえる神主は、氏子の早乙女たちを呼び出す。へ神山の、賀茂の川豊かななる、みとし御田を植ゑんとて、早乙女の袖をつらね……と謡いながら早乙女たちが登場する。エブリを持ち畦で舞う神主と、早苗を植ゑる早乙女たちの、ユーモラスで牧歌的な謡の掛け合いに終始する。神主がリズムカルに動き回り、早少女たちも並んで正面へ出て田植の動作をするところに、豊作を祈念する楽しくめでたい気分が漂う。

中世の田植の神事、田遊びなどの面影が反映している。

能「加茂」の替間狂言だが、独立した狂言として演じられることもある。

〔能〕関寺小町古式
(せきでらこまち こしき)

所は近江の国・関寺。時は七月七日。七夕の祭が行なわれる。住僧は和歌を稽古している稚児を伴い、近くの山陰に庵を結ぶ老女を訪れる。歌道をきわめたといわれる老女に教えを請うためである。老女は問われるままに、歌の起こりや「種は心」であることなどを、優しく説き聞かせる。

僧の話題が「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらは往なごを思ふ」の小野小町の歌に及ぶと、老女は思はずその歌が詠まれた折を懐かしみ、落涙する。老女は小町その人であつたのだ。はなやかな昔に思いを馳せ、老残の身を恥じる。やがて、僧に連れられて関寺の七夕祭りに加わる。稚児の舞に見入っていた小町は、誘われるように立ち上がり、杖にすがりつつ舞い始める。……

「伯母捨」〔檜垣〕と並ぶ三老女の中でも、最も重い秘曲。深刻な夢幻能ではなく、老女のある一日を描いた現在能。静かな出来事の中に生起する心の動き、老いの身の淡い悲しみの表現が、深く、美しい。小町真作の歌が何首も散りばめられ、歌人小町に焦点を当てた能でもある。作者は世阿弥。

金春流では十年ぶりの上演。当時と同じく『六徳本』という江戸前期の善本を踏襲している。《古式》の小書で演じられる。